

2018年6月10日(日)／説教者:神谷武宏

説教:「わたしたちは落胆しません」

聖書:コリントの信徒への手紙二4:1~15

今朝の箇所パウロは、「落胆しません」と言葉を繰り返す。背景にはパウロ自身が落胆した経験があった。パウロは自らの伝道にて築き上げたコリントの教会から資格や形を求められ落胆の思いがあった。またアテネ伝道に失敗し、衰弱しきって恐れと不安に駆られた(Ⅰコリント 2:3)。その状況にどんなに落胆したことか。そういうことを踏まえてパウロは「わたしは落胆しません」という。何故か。

《こういうわけで、わたしたちは、憐れみを受けた者としてこの務めをゆだねられているのですから、落胆しません》(1 節)。私たちがイエスの「憐れみを受けた」ことを知らされる時、イエスの十字架、苦難が私と共にあるためなのだと気づかされる時、私たちの落胆は希望へと変えられるのではないか……。

7 節《ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために》。「このような宝を(すなわちキリストご自身を)」パウロは、土の器に過ぎない私たちの体に納められていると言う。私たちは、どちらかと言うと内側の宝のことよりも、外側の土の器を気にしがちではないか。もちろん多少気にすることは大事だが、しかしそのこと以上に内側におられる宝を、どれだけ気にしている者か?こんな器の中にも尊い宝が入ってくださっているということを。ただただ感謝である。8、9 節に私たちの内側にキリストが居られることの希望の言葉がつづられている。《わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。》

10 節から難しい内容の言葉がつづられているが、ようするに私たちの苦難と希望は、イエスの十字架と復活の出来事の中に表されていることが語られ、私たちの苦難と共に、希望と共に主は居られることが示されている。

以上のことを受けて、16 節からの言葉になる。《だから、わたしたちは落胆しません》。私たちには神を見ることは出来ない。しかし、見えない神を内に覚え感じていく時に、たとえ「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちは落胆しないのである。そのことを神の大いなる恵みとして覚えていきたい。(神谷)